

## 母子を結びつけるマザリーズのメカニズムをどう捉えるか？

石原尚

大阪大学大学院工学研究科

マザリーズが普遍的且つ顕著な現象であるにも関わらず、我々がそれを用いるメカニズムが明らかにされてこなかった理由の一つには、それが無意識の過程の結果であるにも関わらず合理的な理由付けが後から如何様にもできてしまうことがあるように思う。実際、私は先生の論文を読ませて戴いている間に第一子を授かり、しばらくどたばたとした後に再度読み始めたのだが、その時（大変失礼ながら）それまでの間私はこの論文のことも忘れ、無意識的に我が子にマザリーズを使用していた事実にはたと気がついた。そして、なぜ自分はそうしたのか考えたところ、先生が論文で整理された要因はどれも自分にも当てはまっていたように思えた。気持ちも高ぶり、言葉を伝えたい気持ちもあり、またそのように話すと反応してくれるような感じは確かにあった。なぜマザリーズを使ったのかともし聞かれたら、上記に挙げたことを当然の理由として答えると思う。しかし、やはりそれは後付けの解釈に過ぎず、それが本当の原因であったかどうかには何ら保証はない。この意味で、無意識過程それ自体を神経学的に把握しようとする先生の取り組みは非常に重要なものであり、ひょっとすると我々には一見合理的に映らない過程が今後見えてくる可能性がある。

マザリーズの生起過程の解明が難しい理由として、論文でも紹介されているように多くの要因が影響していることがあるのはもちろん、母子のやりとりが循環相互作用系だということもあるだろう。つまり、母が原因となって子の行動が変わり、またそれが原因となって母の行動もまた変わるという繰り返しのの中では、鶏が先か卵が先かという問題のように、ある時点での母の行動の直接の原因を特定することが本質的に困難なのである。ただし、動的な循環の中でもし創発的にある現象が継続的に現れたとしたら、その理由は「その現象（ここではマザリーズ）が、系の要素（ここでは母自身と子供）の振る舞いを安定化させる作用を持ち、その結果、系全体もその現象が現れる状態で安定化されたから」というものとして幾分整理が可能であるように思う。マザリーズによって子供の注意が母に向き、連合学習も進んで反応も良くなるというのは母に向ける子供の行動を安定的なものにする効果に当たるのであろう。それでは、親自身に対しても何かそのような効果があるだろうか？こう考えて、再度我が子に向かって話しかけてみた。まず、無理矢理にマザリーズを用いずに淡々と話しかけてみると、生まれたばかりの我が子は感情をあまり表さず、話しかけにも反応しないためやりとりが成立せず、とても不安を感じ、話し続けるのがとても難しく、正直あまり楽しくなかった。一方で、嬉しいねー！とか、これはいらないよねー、といったような感情がこもった言葉で話しかけると、まるで子供が感情を表現し、周囲に反応をうまく返しているように感じられ、長い時間でも楽しくやりとり（とはいえ実際は一方的な語りかけ）を続けられた。子供の感情を補って表現することで親自身

が不安を感じずに子供とのやりとりを続けられる、という可能性は論文中でも紹介されていなかったが原理的にも実感としてもありそうで、先生が結びでも紹介された「調整能力によってやりとりを持続させる」視点とも一致するように思う。私的な体験の紹介となってしまったが、言いたかったことは、マザリーズは母と子の循環的相互作用の中で立ち現われてくる以上、その原因を単一のものに求めることはおそらく難しく、長い時系列のそれぞれの時点で母子の各々の状態や振る舞い、また両者の結びつきをマザリーズがどのように安定的なものにしているのかという全体的・連鎖的な観点から膨大な観察データを整理することで、メカニズムを把握する上での見通しが幾分かよくなるのではないかということである。マザリーズという現象には様々な機能があり、また多くの要因がその生起に関わっている。目の前にいる人とのコミュニケーションの持続、という大きな視点からこれらをまとめようとしている先生の考えには、上で述べたようなシステム構成論的な立場からも賛同しており、今後の理論の発展に期待している。